

第 13 回羽州街道交流会
秋田市大会 開催報告書

令和元年 2 月
羽州街道交流会

1. 羽州街道交流会とは

羽州街道とは、現在の福島県桑折町で奥州街道から分かれ、宮城県～山形県～秋田県～青森県と東北の日本海側各県を北上し、青森市油川で再び奥州街道に合流した街道で、奥州街道と並ぶ東北の二大街道の一つだった。全長約 500 キロのうち、秋田県を通る部分が全体の約半分もあり、秋田藩にとって最重要の街道でもあった。

羽州街道交流会は、この街道沿線や東北地方に住む街道関連団体、個人で組織する団体で、羽州街道を使った広域連携や広域交流をしながら、各地域の活性化に寄与することを目的に平成 17 年に設立された。これまで 12 回の交流大会を各地で開催してきた。

2. 秋田大会開催の経緯

羽州街道交流大会が、過去に秋田県内で開催されたのは 3 回で、二ツ井町（現能代市）、六郷町（現美郷町）、大館市だった。4 回目の交流大会を秋田市で開催することになったきっかけは、秋田市が中心市街地の活性化の一環として、秋田市中心部を通過していた羽州街道沿線にある文化財を活用しようという方向性と、平成 30 年に来日 140 年を迎えたイザベラ・バードへの関心が高まったこともあり、秋田市で交流大会の開催検討をしていた羽州街道交流会の意見合意があったためである。県庁所在地での開催は秋田市大会が初となり、今後の他県における県庁所在地での開催に先駆けるものとなった。

3. 交流会開催目的

奥州街道と並び、東北の二大街道の一つであった羽州街道は、久保田城下を南北に通じ抜けていた。街道筋には大きな商家が建ち並び、人や物の行き来が盛んであった。旧街道筋には、いまでも歴史的な資源が残され、往時を偲ばせてくれる。

秋田市において羽州街道交流会を開催することにより、市内外の人たちに秋田市における羽州街道と残された文化財や関連する文化施設、行事などを紹介し、過去と現在をもとにしたまちづくりや観光振興をはかる。

4. 実施体制

- ・主催 羽州街道交流会
- ・共催 秋田市
- ・後援 NPO 法人全国街道交流会議、とうほく街道会議、ふくしまけん街道交流会、みやぎ街道交流会、風に揺らぐ紅花 六田宿、アルカディア街道 IB 倶楽部、矢立自然友の会、あおもりかいどう会議、あきた地域資源ネットワーク

5. 日時・会場

- ・令和元年 10 月 19 日（土）13:00～17:10
- ・にぎわい交流館多目的ホール



6. 内容

(1) 交流会

1) オープニング

2) 記念鼎談 1

イザベラ・バードと秋田

講師 藤原佐知子 (秋田魁新報社 さきがけこども新聞編集長)

梶本 歩美 (国際教養大学 助教)

鏡 啓記 (羽州街道交流会 代表幹事)

3) 記念対談

廃道となった秋田の峠

講師 平沼 義之 (廃道探検家<オフローダー>)

石井あつ子 (廃道探検家<オフローダー>)

4) 記念鼎談 2

城歩き・まち歩き・街道歩きの楽しさ

講師 小国 裕実 (久保田城址歴史案内ボランティアの会会長)

柳山 努 (秋田スリバチ学会会長)

長井 克成 (全国街道歩き実践者)

※参加者数 290 名 (秋田市内 221 名、秋田市外 26 名、県外 43 名)

(2) 街道談義

秋田市在住の料理研究家 瀬田川千秋氏 (工房ちあき) による、秋田の
伝統料理再現

「イザベラ・バードと楽しむ 140年前の秋田のおもてなし料理」

○連携事業

羽州街道歴史まつり

【目的】街道ウォーキングや沿線の文化財、文化施設を会場としたイベントなどを実施し、羽州街道の魅力を発信し、歴史観光を推進する。

※にぎわい交流館多目的ホールロビーにて、「羽州街道パネル」(12枚)、「イザベラ・バード」パネル(11枚)の展示を行った。

※同日 18:15 から、秋田文化産業施設「松下」2階大広間で会費制による懇親会「街道談義」を開催した。



東北の街道
羽州街道を行く⑥
刈和野(秋田県)～久保田(秋田県)～金足追分(秋田県)

久保田城下町と北前船の土崎港

久保田城下町と北前船の土崎港

久保田城下町は、奥羽街道の要所として、江戸時代を通じて栄えた。城下町は、城を中心として、東西に伸び、南北に広がった。城下町の中心には、城の跡地があり、その周囲には、商家や町屋が建ち並ぶ。城下町の外には、田舎の風景が広がる。城下町の南には、土崎港があり、北前船が出入りする。土崎港は、奥羽街道の重要な拠点であり、北前船の発着場として栄えた。城下町と土崎港は、奥羽街道の重要な拠点であり、北前船の発着場として栄えた。

雨の中を旅した秋田
Rainy trip in Akita

植物川を川舟で下る

感懐した久保田の町

Going down Onomogawa river by boat

Impressed by Kubota

植物川を川舟で下る

感懐した久保田の町

Going down Onomogawa river by boat

Impressed by Kubota

羽州街道パネル 12枚のうちNo.6

イザベラ・バードパネル 11枚のうちNo.8

7. 鼎談・対談 要旨

記念鼎談1 イザベラ・バードと秋田

「明治時代のイギリス人旅行家の足跡から羽州街道の魅力を探る」

今から 142 年前、横浜港に降り立ったイザベラ・バードは、東京をスタートして日光、会津、新潟、山形、秋田、青森を通り、北海道日高地方のアイヌ集落がある平取まで旅行した。その記録を本にしたのが『日本奥地紀行』で、当時の北日本の辺境の地における貴重な日本人の生活記録がそこに記されている。記念鼎談ではバードに関わってきた方々に登壇していただき、羽州街道交流会の鑑がコーディネーターを務めながら、バードと秋田の関りについて語り合ってもらった。

梶本氏は、国際教養大学で本県について学ぶ「秋田学」の一環として、10 人の外国人留学生を含む 20 人の学生たちとともに、秋田県内のバードの足跡をたどり、「140 年前の秋田の過去と現在を比較する」という「真の秋田<true Akita>」について発表した。いくつかのエピソードのうち、イギリス人留学生が「バードの文章は古い英語で、現在の私たちにとっては難解だった」という反応が印象的だった。

藤原氏は、平成 30 年に一年間にわたって魁新報紙上に連載した「イザベラ・バード秋田の旅」をもとに、ジャーナリストとしてバードの記録の裏付けを取る苦労と楽しさ、驚きなどを話し、連載中に予想を超える読者からの反響があったと、読者からの感想を伝えてくれた。

鑑は、平成 20 年ころ、『日本奥地紀行』をテキストにした、東京から北海道までの取材体験をもとに単行本の『イザベラ・バード紀行』を編集したが、バードの本にたくさん見つかる疑問点について話しをし、梶本氏、藤原氏と意見交換をした。

3名の講師は、今後もバードとかかわりを持ち続け、秋田においてバードを顕彰する活動を支援していきたいという話で結んだ。



記念対談 廃道となった秋田の峠

「地図にはない歴史に埋もれた廃道探しの楽しさを語る」

廃道とは新たな道が建設され使われなくなった道路や、建設途中で工事が中止になり放棄された道路などを指す。対談に登壇した二人の肩書はオフローダーとなっているが、

これは廃道を始めトンネル、橋などの土木遺構、鉄道、森林軌道も含めた現況を、地図を始めとした資料を駆使して現地調査・探訪を趣味とする人を指す。二人はこの分野で日本を代表するトップ・オフロダーで、全国的なマスコミにもたびたび登場している。

今回は前段として、県内に残る思い出深い廃森林鉄道を紹介。北秋田市の太平湖大鉄橋、阿仁合鉱山隧道、森林鉄道として日本一長かった旧二ツ井町の高岩橋、廃湯となった男鹿半島の金ヶ崎温泉、秋田市の仁別森林鉄道の隧道、田沢スーパー林道のトンネル、旧国道 108 号の松ノ木峠を紹介した後、現在の仙北市生保内と盛岡市を結んでいた秋田街道の、県境に新たに作られた明治時代の仙岩峠（国見峠）探索を紹介。明治 8 年から昭和 38 年まで県道・国道として使われた道路で、現在の国道 46 号の前身である。

2006 年に平沼氏、石井氏の二人がチャレンジした際の写真をスクリーンに投影し、極めて困難だった探索を振り返ってくれた。当事者の二人が軽妙な掛け合いでその探索の困難さ、迷い、ためらい、反省を伝えてくれて、会場は笑いとため息が交差する雰囲気となった。あまりの困難さに、石井氏は途中断念するが、その時の思い出話も楽しく、会場にいた人のうち、初めて廃道の世界に触れた人は相当の驚きを味わったようだ。



記念鼎談 2 城歩き・まち歩き・街道歩きの楽しさ

「歩きと地図を楽しむ達人が見た歴史の魅力」

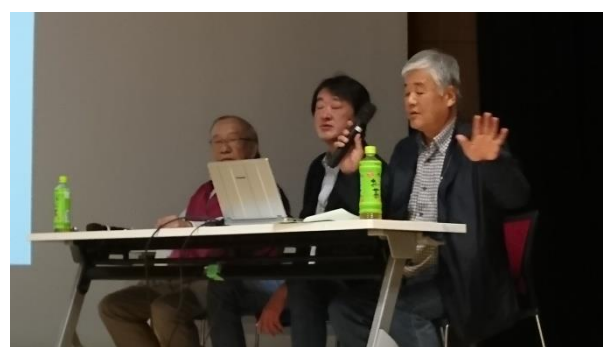
この鼎談では、城歩き、まち歩き、街道歩きの達人 3 名に登壇してもらった。城歩きの達人である小国氏は、久保田城と秋田市中心部、そして羽州街道に精通した方で、歴史案内人の会代表を務めている。今回の鼎談ではコーディネーターも担ってもらった。

柳山氏は秋田スリバチ学会会長だが、スリバチ学会とは、地形に川の流れや地震などで変化が起き、年数が経つとすり鉢状に地形に変化がみられる場合がある。それを古地図と現在の地形を比較し探索する楽しみをする会のこと。柳山氏は現在さきがけ新報紙上において「気ままに凸凹街歩き」を連載中である。スクリーンに江戸時代の古地図、現在の地形図、空撮写真などを写し出し、さらに着色するなどした地図データを駆使して、秋田市のすり鉢地形や、羽州街道の前身である古羽州街道が、秋田市のどこを通っていたかをスリバチ的視点で分かりやすく伝えてくれた。

長井氏は 2006 年から全国の街道を歩き始め、これまで全国 80 か所以上の街道を歩

いた街道歩きの第一人者である。街道歩きの楽しさについて、事前調査を楽しんで行ったのちの「歩き終えた時の達成感」「沿道の文化財を見つけ出す楽しさ」「地元の方々のちょっとしたふれあいの楽しさ」を教えてくれた。会場の皆さんにも街道歩きに挑戦してほしいと語り掛け、まず近所の街道から歩いてみてはどうかと提案した。

小国氏は、千秋公園に残されている久保田城の特徴を、大阪城など他地域の城と重ね合わせて分かりやすく紹介し、さらに、羽州街道が久保田城下をどのように通っていたか、久保田城とどのような位置関係で存在していたかなどを教えてくれた。さらに、自分たちの組織が、久保田城跡、秋田市中心部の歴史的遺産をどのように案内しているかを紹介した。



街道談義 秋田の伝統料理再現

秋田市在住の料理研究家 瀬田川千秋氏（工房ちあき）による、秋田の伝統料理再現
「イザベラ・バードと楽しむ 140年前の秋田のおもてなし料理」

【趣 旨】今から 140 年前、秋田に一人のイギリス人女性が訪れた。かの有名な旅行家イザベラ・バードで、バードはその著書の中で、秋田の自然とそこから採れる食材、そして秋田の人々のおもてなしの心に、とても感銘を受けたようだ。そこで、秋田市在住の料理研究家・瀬田川千秋氏に依頼して、バードが訪れた当時の、「イザベラ・バードと楽しむ 140 年前の秋田のおもてなし料理」を再現していただいた。当時の秋田の食材や調理法を用い、バードが食したかもしれない料理を、街道談義の参加者に味わっていただいた。

【再現料理内容】

- ・ 芹焼き
- ・ 山菜ミズのゴマ炒め
- ・ 枝豆のたまりしょう油焼き
- ・ お漬物（ひがしなるせの美味しいがっこ 5 種盛り）
- ・ かすべ煮

- ・ハタハタの酒煮 松館辛み大根、ポン酢添え
- ・秋田牛（カモシカ肉に替えて）の味噌漬け焼き しし唐ととうもろこし添え
- ・だまご鍋（比内地鶏・三関芹など 地鶏スープと焼き干しこんぶの合わせ出汁 おしょうゆ味で）お一人 1/2 合×50 名分 2 升 5 合の新米で
- ・とんぶりとろろそば
- ・寒天 3 種
- ・あずきでっち
- ・ずんだでっち（秋田の枝豆を用いた創作甘味）
- ・土鍋ごはん



再現料理の一部



街道談義の様子